

琉球大学学術リポジトリ

沖縄の地域的特色を活かした衣生活教材開発： 琉球紅型の教材研究

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2021-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本, 由香, Matsumoto, Yuka メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/48270

沖縄の地域的特色を活かした衣生活教材開発

—琉球紅型の教材研究—

松本 由香*

Using Okinawan Areal Characteristics of Developing Teaching Material on
Clothing Life: A Case Study of Ryukyu *Bingata*

Yuka MATSUMOTO*

I 研究目的

沖縄県には、紅型をはじめとする多様な染織文化が存在し、それらは地域の貴重な文化的財産である。しかし地域課題として、生産者は減少、高齢化、後継者不足の傾向にあり、学校教育においては、染め織りが取り上げられることがほとんどないことが、筆者が2013・2014年度におこなった染め織り産地の現地調査と、2013～2015年度に沖縄県の小・中・高等学校300校におこなったアンケート調査から明らかである。その調査で、もし染め織りの地域教材があれば教育に取り入れたいとする回答が多く得られたことから、2015～2018年度に科学研究費を受けて、沖縄の多様な染め織りの、人びとの暮らしとのさまざまなかわり方を描いた衣生活教材冊子の開発をおこない、その成果を、2019年度琉球大学研究成果公開（学術図書等刊行）促進経費を受けて、書籍『沖縄の染め織りと人びとの暮らし—家族と地域文化、経済とツーリズムから考える—』（松本由香・佐野敏行共著、琉球新報社、2020年3月）を刊行した。

本研究は、さらにこの地域課題を解決するため、家庭科等の学校教諭が教育実践をおこなって子どもが染め織りを身近に感じられるような、アクティブラーニング型の染め織り教材（紅型、糸づくり、染め、織り・編み）の開発を、2019～2022年度に科学研究費、基盤研究（C）「沖縄の地域的特色を活かした衣生活教材開発—家庭科における染め織り実習教材開発—」（19K02765）として

おこなうものである。

本報では、このうち、2019年度におこなった琉球紅型の教材研究について述べたいと思う。

II 研究方法

琉球紅型の教材研究として、紅型の伝統的な工程を筆者なりに区分けしてまとめ（図案、型彫り、紗張り、型置き、色差し、隈取り、糊伏せ、地染め）、伝統技法、ステンシル（型紙の上から直接布を染める技法）の簡単な型染めなどの、初歩的・中間的・専門的な学び方を、試作して段階的に整理した。そしてそれぞれの学び方について、筆者が担当するクラスで教育実践をおこない、教材を試作開発した。その結果を次に述べる。

なお、紅型の伝統技法については、筆者が那覇市の若狭公民館の紅型教室で学んだ技法をもとにしている。

III 紅型教材開発

紅型の段階的な学びを、専門的な学びから初歩的な学びまで、①伝統技法による「紅型染め」、②ステンシル型染めの「摺り込み」、③筆での「描き絵」という3段階に整理し、それらの学びの方法を、琉球大学教育学部学生、琉球大学教員免許状更新講習受講者、琉球大学公開講座受講者および那覇市内の小学生に教育実践した。その時期と受講者の人数等について、次にまとめる。

* 琉球大学教育学部教育実践学専修 教授

- ① 伝統技法による「紅型染め」:
- ・琉球大学教育学部「教育臨床研究Ⅱ」履修学生：2016年度7名
 - ・琉球大学教育学部「服装文化論」履修学生：2017年度5名、2018年度5名
 - ・琉球大学教育学部「沖縄生活文化論」履修学生：2018年度15名、2019年度16名

- ② ステンシル型染めの「摺り込み」:
- ・琉球大学教員免許状更新講習受講者：2018年度6名、2019年度6名
 - ・琉球大学公開講座受講者：2018年度6名、2019年度6名
 - ・沖縄市の民謡教室生徒：2018年度10名
 - ・那覇市立真嘉比小学校3年生：2019年度33名

- ③ 合成染料による「描き絵」:
- ・琉球大学教育学部生活科学教育専修学生：2019年度12名

次に、「1. 紅型の授業実践」で、それぞれの技法での実践について述べ、その実践をもとに、「2. 紅型の教材提案」で試作した教材を紹介する。

1. 紅型の授業実践

① 伝統技法による「紅型染め」

ハンカチを白地のままでワンポイントに染めることをおこなった。型紙は15cm角とコンパクトにした。

1 図案・型彫り、2 紗張り、3 型置き、4 色差し・隈取り、5 水元・仕上げ、という5つの工程を、90分授業にそれぞれあてはめておこなってきた。

授業の最初には、伝統的な紅型の写真を見せ、紅型の特徴や歴史を簡単に話したあと、受講生みずから図案を考え、型紙を彫っていった。一つ一つの工程は、紗張りや型置きなど、技術を要するもので、そのむずかしさの一端を、学生たちは体験したと思う。

色差ししたあと、水元の工程で糊を落とし、くっきりと文様があらわれるのを見て、多くの学生が感動した(写真1・2・3・4)。

授業後の学生のレポートでは、実際に紅型の技

法を体験してみて、紅型が身近になったといい、卒業後、教師となって学校教育にたずさわることになったとき、体験することの大切さの認識を教育にいかしていきたいということであった。また工芸の現在の継承課題に思いをはせる学生もいて、実習により、具体的に地元の文化について再認識をする機会を得たのではないかと思う。

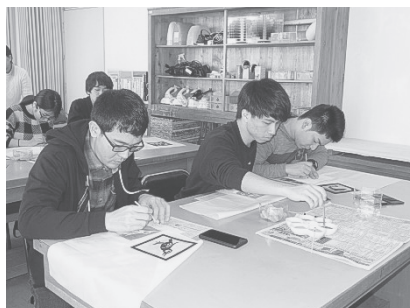


写真1 授業での型彫り [琉球大学2019.12]



写真2 学生の作品
[琉球大学2018.2]

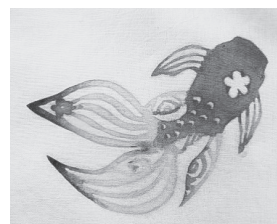


写真3 学生の作品
[琉球大学2020.1]



写真4 授業での完成発表会 [琉球大学2020.1]

② ステンシル型染めの「摺り込み」

ハンカチの地染めなしの白地にワンポイントを染め、紅型の顔料をつかって色差し・隈取りをおこなった。15cm角の型紙彫りは、切り抜いたところに色差しするというステンシルの技法を用いた。この技法は、〈琉球紅型教材〉の「1. 紅型の由来と歴史」の項で述べるが、型紙を布に当てて、型紙の切り抜いたところに色を差す補添型という紅型の前身の技法にも通じるところがあり、「摺り

込み」とよぶことにする。

琉球大学教員免許状更新講習、琉球大学公開講座、市民教室の受講者、小学生という、子どもから大人にまで幅広く教育実践をおこなった。教員免許状更新講習と公開講座ではワンピースを、布を裁断し、色差し、縫製まで1日、ないし2日でおこない、完成させた(写真5・6)。

小学生は、小刀をつかうことにはけがの危険があるので、ハサミをつかい、型紙には、伝統的な渋紙(ST)ではなく、13cm角にしたプリンター用印字シールをつかった。

型紙と布にすきまがあると、色がにじみやすいので、刷毛に色をとってから余分な色は雑巾に吸わせてから摺り込めば、にじみが生じにくい(写真7・8・9)。

実習者からは、自分の考えたデザインで染めて、紅型の色の特徴の一端を知ることができ、また着ることを楽しめてよかったと評価を受けた。



写真5 公開講座での作品 [琉球大学2018. 7]



写真6 市民教室のようす [琉球大学2019. 3]



写真7 小学3年生の授業

[真嘉比小2019. 12]



写真8 色差しのようす

[真嘉比小2019. 12]

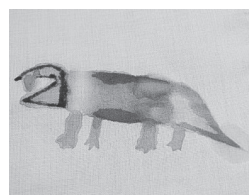


写真9 児童の作品

[真嘉比小2019. 12]

③ 筆による「描き絵」

ファブリエ (SEIWA社製) という合成染料をつかい、筆で自分の考えたデザインをハンカチに描く実習をおこなった。筆をつかって染料で文様を描くのは、型染めをした後に顔料で色差ししたり墨で描き絵する技法が、琉球王国時代の紅型にみられることから、この技法も、紅型の技法に通じるものととらえることができるであろう。

まず図案にしたがって青花ペン(水洗いで消える)でハンカチに描き、その線をカチンペン(黒色染料ペン)でなぞる。その線の内側をファブリエで塗り、描く(写真10・11)。

色は合成染料であるが、紅型と同様の原色7色と、隈4色をつくり、隈取りもおこなった。

体験した学生からは、筆で色を塗って染めることが、なかなか日常にはないので、意外で楽しく、手軽に色をつくることができ、実習の準備も手軽にできるのではないかとという評価を受けた。



写真10 描き絵の授業

[琉球大学2019. 11]



写真11 学生の作品

[琉球大学2019. 11]

上で述べた授業実践から得られた知見により、紅型の教材原稿を次のようにまとめたので、紹介してみたい。

2. 紅型の教材『琉球紅型』の提案

教材の内容は、

1. 紅型の由来と歴史

- (1) 由来と特徴
- (2) 古琉球時代の紅型
- (3) 近世琉球以降の紅型

2. 紅型の工程とその特徴

- (1) 紅型の特徴
- (2) 紅型の工程
 - ①図案、②型紙づくり、③型置き、
 - ④地入れ、⑤色差し・隈取り、
 - ⑥水元、⑦糊伏せ、⑧地入れ、⑨地染め、
 - ⑩色止め・水元

3. 実際に紅型の作品をつくってみましょう

- (1) 「紅型染め」：
 - ①図案、②型紙彫り、③紗張り、
 - ④型置き、⑤色差し・隈取り、
 - ⑥水元、仕上げ
- (2) 「摺り込み」：
 - ①図案、②型紙づくり、
 - ③色差し、隈取り
- (3) 「描き絵」：
 - ①図案、②文様を描く

4. 紅型実習のポイント

次に、教材内容を示す。

<琉球紅型教材>

1. 紅型の由来と歴史

(1) 由来と特徴

「紅型」の名称は、香川県出身の染織の研究者、鎌倉芳太郎かまくらよしなろう氏が、大正時代、紅型の型紙を収集し調査したことに由来します。首里で色絵型付けを「ピンガタ」とよんでいたことから、彼によって、「紅型」の字があてられました。それ以前は、職人のあいだで「カタチキ」、「ピンイリ」などとよ

ばれていました。

この技法の起源は、14世紀から15世紀にさかのぼるといわれています。琉球へは、中国、日本、東南アジア諸国などと盛んに交流していた時代に、さまざまな知識、技術、制度が移入し、それらを受容して、琉球王国は独自の発展をとげ、その技術の一つに紅型があったと考えられます。琉球王国が形成される前の14世紀、浦添王朝が栄えていたとき、紅型の前身である浦添型うらしめがたとよばれる技法があり、コンニャク糊をつかって型置きをする前に、布に型紙をあてて墨を摺り込む技法がおこなわれていたことが、伊佐川洋子氏と仲本のな氏の研究によって明らかにされています。また型置きをして色差しくまど、隈取りみずもと、水元の一連の紅型の工程を終えてから、色差ししたり墨で描き絵することがおこなわれ、型紙は種類の違うものが数枚用いられたそうです。また顔料の定着剤としてもコンニャク糊がつかわれていました。

18世紀には、型紙による染めの型付けと、糊を入れた筒の先から糊を出して線を描く筒描つつがきの技法が整いましたが、これらの技法は、インドやジャワの更紗、中国の型染めの影響を受けた一方で、日本の友禅染めに影響を与え、のちにその影響を受けたといわれています（写真12・13）。



写真12 古紅型
『紅型古裂帖』
琉球大学附属図書館所蔵



写真13 古紅型
『紅型古裂帖』
琉球大学附属図書館所蔵

紅型の特徴は、朱、黄、藍、紫、緑を基本にした色の鮮やかさと、文様に立体感と陰影をつける隈取りに特徴があります。そして色鮮やかな文様に隈取りがなされた琉球紅型には、力づよさを感じさせる特徴があります。この紅型は、王族、士族の衣装として、琉球王府の保護のもとで発展し

ました。沖縄県立博物館・美術館所蔵品のなかに、中国からの絹の縮緬に、18世紀に首里で紅型染めされた胴衣があります。この花の丸文様は、日本の友禅染めの影響を受けたとされ、中国、日本、琉球の三つの文化の特徴が組み合わされたものといえます（写真14）。



写真14 絹浅地楓に花の丸文様胴衣
[沖縄県立博物館・美術館所蔵資料]

(2) 古琉球時代の紅型

現存する最古の紅型は、久米島具志川村字兼城かねぐすくに伝わる尚円王統治（1470～1476年）の頃に染められた菊花鎖繫文絹地の型付胴衣裂地かたつけどういきれじとされています（写真15）。しかし沖縄に、1609年の薩摩藩による琉球侵攻以前の、古琉球時代の紅型が残っている例はまれで、紅型を研究した鎌倉芳太郎氏によれば、『古琉球型紙・五』で、久米島の最古の紅型の次に紹介されている紅型は、1713年から1751年に国王に在位した尚敬王時代のもので、これら2つの資料には、250年ほどのときのへだたりがあります。



写真15 菊花鎖繫文絹地裂地
[『古琉球型紙・五』:22]

それは太平洋戦争の戦火で多くの貴重なものが失われてしまったからです。そんななかで、筆者は、鹿児島県の奄美大島で、17世紀以前の古琉球時代につくられた紅型を見る機会があり、このことについてふれてみたいと思います。

奄美大島の西南端に位置する宇検村阿室集落で、盆行事の最終日シバサシの日の朝から夕方にかけて、1年に1日だけ、家のなかに古琉球時代の古い着物が展示される日があります。この着物は、シバサシギンとよばれ、奄美が昔琉球王国の支配下にあった時代に、王府から賜った着物を家の床の間などに飾る風習が現在まで続いているものです。

奄美群島は、古くから中国と日本本土を結ぶ交通の要所であり、双方の文化が往来する場所でした。14世紀から15世紀には、琉球王国の影響が奄美群島に及び、15世紀半ばには、琉球王府が、奄美大島を支配下におきました。琉球の地方行政府である蔵元くらもとが、1466年に大島と徳之島におかれ、間切まぎりやシマという行政区画に分けられました。また祭政政策の一貫として、女性の司祭であるノロが各地に配置され、地方行政とともに祭事を司りました。そして奄美群島は、1609年に、薩摩の侵略を受けるまで、琉球王国の支配下にありました。

ここで祭政を司るノロについてみたいと思います。ノロは、琉球王国の聞得大君きこえおおきみを頂点とする神女組織に属し、この組織は、15世紀後半の尚真王から16世紀前半の尚清王の統治の頃に成立したといわれています。聞得大君は、国王の夫人や姉妹がつとめました。支配下にあった奄美大島にも、「首里の印」の朱印のある辞令書をもつ神女「御印加那志ごいんがなし」がいたそうです。ノロに任命されることが決まった女性は、辞令書を賜るために、首里に詣出て、辞令式で、辞令書とともに祭祀具や祭祀の衣装を授かり、地元に戻りました。

その賜わって子孫へと代々伝えられてきた衣装のなかに、宇検村阿室のある家が受け継いできた紅型の胴衣があります。シバサシの日にこの家を訪ねると、紅型の衣装が、紺地の着物の上に置かれ、神酒あみきが供えられていました（写真16・17）。奄美のノロ任命は、薩摩の琉球侵攻までおこなわれていて、1609年以後はとだえたので、この胴衣は、1500年代につくられたものといえます。紅型は、奄美ではつくられなかったので、首里でつく



写真16 神酒が供えられたシバサシギン
[阿室2019. 9]



写真17 紅型の胴衣
[阿室2019. 9]

られたものといえます。

この家の紅型は、保存状態もよく、紅とブルーの地と文様の色彩が鮮やかで、500年近く経ったものとは思えない大変美しいものでした。その文様は、桜(写真18)、牡丹(写真19)、河骨(ハート形の葉 写真20)、沢瀉(三片の葉 写真21)、笹(写真22)、紅葉(写真23)、流水(写真24)で、紅型に多くつかわれてきた当時の代表的な文様です。桜や河骨、紅葉は、日本本土に由来し、牡丹は中国に由来することから、文様には、文化的な

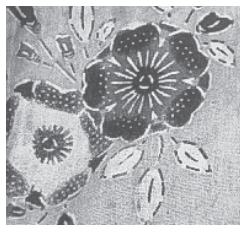


写真18 桜文様



写真19 牡丹文様



写真20 河骨文様



写真21 沢瀉文様



写真22 笹文様



写真23 紅葉文様



写真24 流水文様

交流がみられます。

その色材は、鉱物に由来する顔料(石黄、^{せきおう}胡粉、^{ごふん}岩紺青)や藍蠟、^{あいろろ}松煙、^{しょうえん}臘脂がつかわれていたと考えられます。文様は石黄(黄)、胡粉(白)、臘脂(赤)、松煙(墨)で描かれ、地の赤は臘脂、ブルーは岩紺青で染められたのだらうと推察します。布地は紅地とブルー地の2種類が縫い合わされ、どちらの布地も線彫りの型紙(写真30参照)1種類がつかわれ、ブルー地のほうは、型紙面の大きさは、たて約30cmよこ約35cmで、型紙を布にあてて、流水や紅葉の輪郭、河骨の茎などに墨を摺り込み、そのあとで型置きして色差し、隈取りがなされたことがわかります。墨の摺り込みは、浦添型の技法に由来するものと考えられ、紅型の型置きの技法が完成する前の古い技法の名残りとも考えられます。

その素材は、手ざわりから、木綿だとわかり、細い手紡ぎ糸で緻密に手織りされていました。木綿は、1611年に、儀間真常が沖縄本島で栽培したのが最初とされ、それまでは沖縄でつくられていなかった繊維であり、1500年代には、まだ大和でも綿花の栽培は一般的ではなかったので、おそらくこの木綿布は、明から舶載されてもたらされたものかと思います。木綿はこの当時、大変貴重であったことから、高級な冬着であったと考えられます。この胴衣の例も、布は中国、文様は中国と日本本土に由来し、琉球で染められたものといえ、3つの地域の文化が混合されたものといえます。

(3) 近世琉球以降の紅型

18世紀には、首里に紅型の工房が7軒ほどあり、それぞれとくいとすの染色、工様があったそうです。漆器製作を司る貝摺奉行所に所属した文様のデザインを考案する絵師が、各工房に意匠を伝え、王府の納殿が、必要な布や顔料を必要な分だけ工房に配分しました。現在までその名が知られている工房に、沢岬家、知念家、城間家があります。沢岬家は、沖縄戦前に継承がとだえましたが、15世紀前の浦添王朝時代に、コンニャク糊を顔料の定着剤にした浦添型の染めをおこなっていたことが知られています。

知念家は、18世紀半ばに首里で型付屋を営んでいて、19世紀半ばの尚泰王の時代には、王家に紅型を納めていました。1879（明治12）年の廃藩置県以降、紅型は王府の庇護を失い、急速に衰退していくなかで、知念績秀氏からその息子、知念績弘氏に受け継がれ、現在、知念績元氏から二人の息子に受け継がれ、かつて型紙に貼る紗がない時代におこなっていた、絹糸をつかって型紙のかたちを整える糸かけの技法が伝えられています（写真25）。

城間家も、250年ほどの紅型の歴史をもつ工房



写真25 糸かけの技法による型紙
[知念紅型工房2016.1]

で、廃藩置県まで、首里で染めをしていました。沖縄戦で、首里が破壊され、工房の道具や型紙も消失してしまいましたが、戦前に、城間家を継いでいた城間栄喜氏が、大阪に行ったとき、50枚の型紙を預けておいたので、戦後、大阪に残っていた型紙を沖縄に持ち帰ることができました。ほかにも、鎌倉芳太郎氏が、戦前の沖縄で、紅型の型紙を1,000枚ほど収集し、本土に持ち帰って残っていたので、終戦後、紅型の復興を考えていた城間栄喜氏は、鎌倉氏のところに行って型紙のコピーをつくり、それを沖縄に持ち帰って、コピー

から型紙を復元したのです。こうしてかなりの数の型紙がそろったことで、紅型の復興が始められるようになりました。

首里にもどった城間栄喜氏は戦災で失った家屋と仕事場の代わりにテントを建てて暮らしました。生業のために、自分の手技をつかうことを考え、アメリカ軍の兵士らに向けて、紅型をあしらったはがきをつくりました。それをテントの軒先に張った麻縄につるして売ったそうです。その後、タペストリー、テーブルセンターなどの大きなものをつくれるようになると、自分はこれから何をめざしていくのかを問うようになりました。着物はどうかと考えるようになったとき、栄喜氏は、着物や帯をつくるのが、紅型の技術を存続させるのに良いことだと考えたそうです。王府の人だけが着ることができたのが紅型であったので、王府が消滅してしまった後、沖縄の人びとが紅型を着ることはありませんでした。本土復帰後に、城間栄喜氏は、京都の呉服問屋と取り引きするようになり、自分のつくったものの販路を確保すると、紅型の着物づくりを始めました。栄喜氏の仕事は、長男の城間栄順氏に受け継がれ（写真26）、また栄喜氏に師事して大成した紅型作家は多く、玉那覇有公氏、藤村玲子氏らがいます。玉那覇有公氏は、1996年に、国の重要無形文化財技術保持者となり、両面染めの技法を、彼の次男の玉那覇有勝氏に伝えています（写真27）。



写真26 城間栄順氏による
ミーカガン（水中めがね）文様
[城間びんがた工房 2014.2]



写真27 玉那覇有勝氏による
両面染め
[玉那覇紅型工房2016.1]

個人が果たした紅型復興の役割のほか、戦後の1950年には、組織的なうごきも始まり、紅型保存会が結成されました。1973年に、紅型が沖縄県の無形文化財の指定を受けると、その数年後の1976年に、琉球びんがた事業協同組合が組織され、保存をする段階から産業として発展させる段階になりました。その後も、1984年、国の伝統的工艺品指定、2006年「琉球びんがた」の商標登録へと進んできました。琉球びんがた事業協同組合では、現在、22の組合工房があり、組合員は、それぞれの事業所で作業をおこなっています。近年、紅型にたいする関心がひろまるなか、組合に入らないで活動をしている若いづくり手が、那覇市近郊の南城市、宜野湾市、糸満市などで多くみられるようになりました。本土から移住してきた人も多くいます。

紅型の語は、琉球びんがた事業協同組合によって、つかい方が再定義されています。「紅型」は、多色が用いられた型染め、「藍型」は、藍色と墨のみで染められた型染め、「びんがた」は、紅型と藍型の総称とされています。かつて多色の紅型は、礼服や晴れ着として着られ、藍型で、藍地に白い柄のものは普段着に、白地に藍色の文様の入ったものは清明祭や霊所参りのときに着用されました。

2. 紅型の工程とその特徴

(1) 紅型の特徴

次に、紅型の工程とその特徴について述べます。

紅型の技法は二つに分けられ、一つは型紙を用いて糊を置く型付け(写真28)、もう一つは、糊筒から糊を押し出して文様を描く筒描き(写真29)があります。

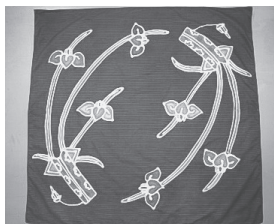


写真28 型付け用型紙 写真29 筒描きのうちゅくい(風呂敷)

またつかわれる色によって、(1)で述べたように、いろいろな色の顔料がつかわれた紅型と、藍色と

墨だけで染められた藍型があります。

さらに型紙の様式によって、次の4つに分けられます。①白地型は、地色が白で、文様部分の型紙を残し、背景を切り抜いたもの、②返し型は、白地で染めた文様部分を糊伏せし、地染めするもの(写真28)、③染地型は、線彫りで、文様の輪郭部分を彫り、色差ししたあと、白く残したい部分や文様部分を糊伏せし、地染めするもの(写真30)、④臙型は、染地型などで一度色差しした布に別の型紙を用いて型置きし、色差してから地染めしたもので、白地型と染地型の二つの染めの方法を組み合わせて染める技法です(写真31)。この複数枚の型紙を用いる技法は、前述したようにやはり複数枚の型紙をつかう浦添型の名残りのなかもかもしれません。



写真30
染地型の型紙

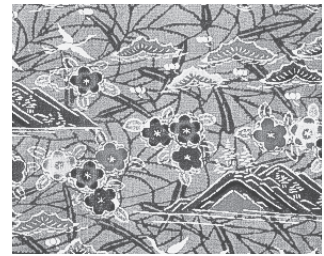


写真31 臙型の染め
[『日本民藝館所蔵沖縄染織品
第3巻・紅型』:109]

紅型は、色に特徴があります。鉱物に由来する顔料や、墨、コチニール虫から採れる臙脂などがつかわれ、フィール(緋色・赤)、ヒグ(薄紅)、ブキ(ピンク)、ティルルー(黄)、クチバ(橙)、ムラサチ(赤紫)、チチョー(桔梗)、オーサ(緑)、フェイル(灰色)、ミヂイル(水色)、オード(黄土)、チャイル(茶色)などの色がつかわれてきました(写真32)。

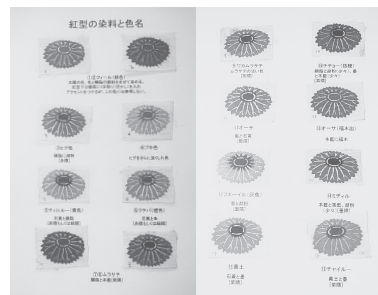


写真32 顔料の伝統的な名称の資料
[琉球大学附属博物館館収蔵資料]

(2) 紅型の工程

ここではとくに、返し型の型染めについて説明します。

紅型の工程は、①図案、②型紙づくり、③型置き、④地入れ、⑤色差し・隈取り、⑥水元、⑦糊伏せ、⑧地入れ、⑨地染め、⑩色止め・水元、に分けられます。

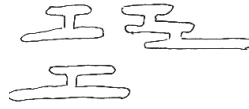


図5 霞

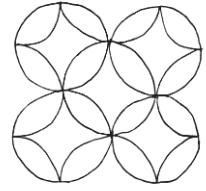


図6 七宝

① 図案

紅型によく描かれる文様には、次のようなものがあります。

- ・植物：松、梅、笹、蘭、牡丹、椿、藤、菊、水仙、桔梗（図1）、芭蕉、河骨、沢瀉、桜、葵（図2）、紅葉
- ・動物：鶴、蝶、鳳凰、雁、鴨、燕、貝、魚、龍、唐獅子
- ・建築物：城、石垣、橋、塀、桧垣（図3）、船、水車
- ・器物：扇、傘、花笠、短冊、巻物、鈴、手毬、熨斗（図4）、結び紐、房
- ・自然現象：瑞雲、霞（図5）、山水、遠山、流水、波、島、岩、太陽、月、星
- ・割付文：巴、格子、菱、石畳、七宝（図6）、亀甲、鱗、立涌（図7）、青海波（図8）、網目、麻の葉（図9）、雪輪（図10）、唐草

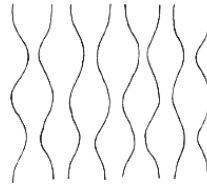


図7 立涌



図8 青海波

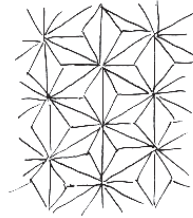


図9 麻の葉

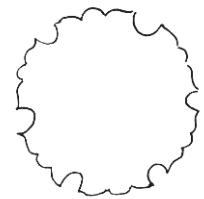


図10 雪輪



図1 桔梗



図2 葵

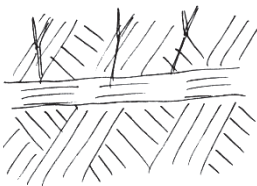


図3 桧垣

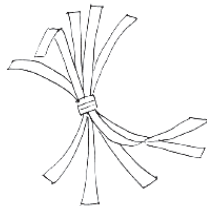


図4 熨斗



写真33 図案



写真34

美濃紙を貼ってつなぎを描いた型紙

王府時代、貝摺奉行所に所属する絵師が文様を描き、紅型師に渡され、型紙に彫られました。図案は、南方、中国、日本本土の風物が混然一体となったもので、沖縄特有の花鳥風物よりも、外来のインド、タイ、ジャワ更紗からの花鳥、中国の鳳凰、瑞祥文様、日本本土の花鳥風物が多く、当時、舶載された布や着物などの文様からとったものと考えられます。

- ・考案して鉛筆で描いた図案（写真33）を、美濃紙に写し、型紙に糊で貼る。
- ・型紙は、伝統的には渋紙をつかうが、現在一般的には、洋型紙ST（8丁12番）をつかう。
- ・糊は小麦粉30gに水200ccの割合で混合し、なべで煮立ててつくる。ダマをつくらないことが大切。さましてから刷毛で型紙に塗り、その上から美濃紙をしわがよらないように貼る。
- ・型紙は、染地型か白地型か、切り抜く箇所を考え、型彫りの前に、フェルトペンで彫る線をなぞり、赤えんぴつでつなぎを描いておく（写真34）。

② 型紙づくり

- ・型彫：次に小刀で型彫りをおこなう。つなぎを残して彫る（写真35）。小刀はシーグとよばれ、かつて手づくりされていた（写真36）。

昔からつかわれてきた彫るときの下敷となるルクジュウ（写真37）は、島豆腐を乾燥させてつくった蠟のようなもので、植物性の適度な油気があってよいとされます。



写真35

つなぎを残して彫った型紙



写真36 シーグ

[琉球大学附属博物館所蔵]



写真37 ルクジュウ

[琉球大学附属博物館所蔵]

- ・彫った型紙をバットの水に浸し、美濃紙がふやけたらがし、水洗いして、バスタオルの上ののせ、タオルで水気を取り、新聞紙には

さんで乾かす。

- ・紗張り：型紙の大きさに切ったテトロン紗を、カシュー（合成漆）で貼る。平らにした新聞紙を多く用意し重ねておく。その上に型紙を置き、カシューを刷毛で2回塗る。

1回目：カシュー1、シンナー3の割合で薄め、刷毛で型紙に十字を描き、対角線はげの方向から4分の1ずつ塗る（写真38）。新聞紙を型紙の下から1枚とり、上に重ね、余分のカシューをとり、それを数回繰り返す。半乾き状態のとき、型紙のつなぎを小刀で切ってとりのぞく。

2回目：カシュー1、シンナー2の割合で薄め、上から順に、左から右へ方向に刷毛でカシューを塗る。新聞紙を下からとり、上に重ね、余分のカシューを押してとり、数回繰り返す。紗のゆがみ、紗の目がつまっていな
いか、光に当てながら点検する（写真39）。

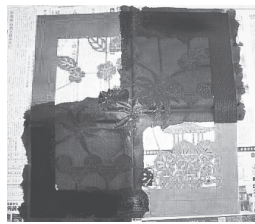


写真38

1回目カシューを1/4
ずつ塗る



写真39

2回カシューを塗り
完成した型紙

③ 型置き

- ・テーブルセンターなどの場合、型板（ベニヤ板）に、裁ち目を画びょうで細かめに留める。
- ・着尺や帯地の場合、型板にスプレー糊を軽く吹きつけ、その上から布を貼る。
- ・布地をしっかりと型板に固定したあと、型置きをする。
- ・型紙を湿らせ、布地になじむようにする。型紙を1回のみ使用する場合はほか、次々に繰り返して型紙を置いて型置きする場合、先に置いた糊で型紙を汚さないようにする。
- ・型糊は、もち米と糠（ぬか）を水で練り、蒸し、さらに塩、石灰を入れて練ってつくってきたが、現在、市販の糊が一般的につかわれている。すり鉢に入れた糊に、湯を少量ずつ

加えて、すりこぎで練り、すりこぎを持ち上げたとき、絶えまなく糊がしたたり落ちる状態になるまで練り、糊のひび割れを防ぐために、グリセリンを糊500gに対し15ccの割合で入れてさらに練る（写真40）。



写真40 型糊



写真41 型置き

- ・あらかじめ水に浸けておいた型へらの水気をふき、糊を型へらにとり、型紙の上から左右に型へらを動かして糊を置く。糊が均等な厚さになるようにする（写真41・42）。

沖縄戦直後は、米軍のレコード板を切って、型へらとしてつかっていたそうです。また筒描き用の糊筒の先の金具には、機関銃の空の葉きょうを拾い、メリケン袋の布を縫って先を削った葉きょうを糸でくくりつけてつくったそうです（写真43）。

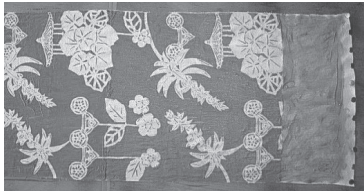


写真42 型置きした布



写真43 糊筒[琉球大学附属博物館所蔵]

分位煮る。冷ましてから、ふのり液としてつかう。

地入れ液は、使用する布の素材によって、濃度が異なります。

- ・木綿・麻：1 番豆汁（大豆1、水1の割合でミキサーにかけ布で漉した豆乳、写真44・45）を7倍に薄め、ふのり液10%（写真46）を入れてまぜる（写真47）。
- ・絹：1 番豆汁を8～9倍に薄め、ふのり液を10～15%入れてまぜたものをつかう。

布を張木、伸子で張り、布地の表から刷毛で地入れ液を塗り、次いで裏返し、伸子を張り直し、裏は2回地入れ液を塗ります（写真48）。



写真44

1 晩ふやかした大豆

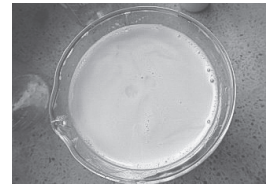


写真45

ミキサーをかけた豆汁



写真46

ふのり(左)とふのり液(右)



写真47

完成した地入れ液

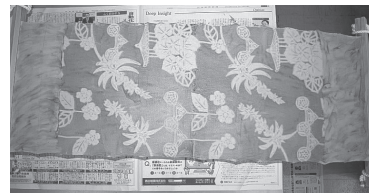


写真48 張木に掛けて地入れした布

④ 地入れ

型置きし、乾いた布に、豆汁にふのりを混ぜた地入れ液で、地入れ（豆引きともいう）をします。これは、色差しの顔料のにじみを防止し、発色を鮮明にするためです。

- ・ふのりをミキサーで攪拌し、煮て溶かす。ふのり30gに水1リットルの割合で、中火で15

⑤ 色差し・隈取り

地入れした布地が乾いたあと、色差しをおこないます。

色のつくり方は、次のようです。

- ・粉状の各顔料（石黄、胡粉、洋紅、藍、墨、群青、朱、弁柄）に、水（水と泡盛を同量で割ったもの）を少量ずつ加え、乳鉢でよく練って

おく。冷蔵庫で長期間、保管できるが、1週間に1回程度、乳棒で混ぜておく(写真49)。



写真49

乳鉢ですりませた顔料

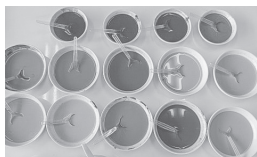


写真50 色と隈

- ・3倍豆汁(1番豆汁を3倍に水で薄めたもの)に、バインダー(SEIWA社の更紗用を使用)を9分の1から10分の1の割合で加える。
 - ・このバインダー液と顔料のほか、合成顔料(レッド、スカイブルー、イエロー、ネイビーブルー、ブラック)も少量つかう。
- 顔料の配合のし方は、次のようです(写真50)。
- ・ピンク: 胡粉+洋紅+(レッド:少量)
 - ・桔梗: 洋紅+胡粉+(藍+レッド+ネイビーブルー:少量)
 - ・ぶき: 洋紅+胡粉+群青+(レッド:少量)
 - ・灰色: 墨+胡粉
 - ・ブルー: 群青+胡粉+スカイブルー
 - ・黄: 石黄+(朱+イエロー:少量)
 - ・オレンジ: 石黄+朱
 - ・グリーン: 石黄+藍+(イエロー+スカイブルー:少量)
 - ・朱: 赤朱+(レッド:少量)
 - ・赤紫: 洋紅+(藍:少量)
 - ・茶色: 弁柄
 - ・こげ茶: 弁柄+墨

- ・あらかじめ、^{こほけ}小刷毛は、水で濡らしてから水分をタオルでふき取っておく。色を小刷毛で差したあと、乾いたら、二度摺りする。黄、ピンクなどの薄い色から差し、濃い色はあとにする。色は、あらかじめ水にぬらしてから水気をふいておいた小刷毛に少量とり、すぐに余分の色をタオルでとってから差す(写真51)。
- ・乾いたら、その後隈取りをする。筆と、筆先をあらかじめ切っておいたぼかし用筆を2本、箸のように持ち、筆で色をさし、もう1本でぼかす。これらの筆も、あらかじめ水で

ぬらし、水気をふいておく(写真52)。

筆や小刷毛は、本来、紅型づくり手が自分で、女性の切った髪と竹筒でつくったそうです(写真53)。



写真51 色差した布



写真52 隈取りした布



写真53

人毛と竹でつくった筆

[琉球大学附属博物館]

紅型に使用する隈は、次の4色あり、そのつくり方と、重ねる地の色についてまとめます。

- ・赤隈: 洋紅+レッド: ピンクに使用
 - ・黄隈: 洋紅+レッド+(藍:少量): 黄、灰色、オレンジ、ぶき、黄緑に使用
 - ・桔梗隈: 洋紅+レッド+(藍:黄隈より多く): 桔梗、灰色、若紫、赤紫に使用
 - ・藍隈: 藍+群青(藍と群青は同量)+ネイビーブルー: 青、緑、灰色、ピンク、赤紫に使用
- 藍型には、墨隈のみをつかいます。
- ・墨隈: 墨+ブラック+藍(ブラックの1/3量)

⑥ 水元

色を布地に定着させるために数日枯らして(乾かして)蒸したあと、バットの湯に浸し、糊などの不純物を落とします。

40℃位の湯に数時間つけた後、糊がふやけたら糊をゆらしてとり、流水ですすぎ、しばらくタオルでそっと裏から拭いて水分を取り除き、干します。反物は、張木にかけて干します。このとき伸子をつかいません。

⑦ 糊伏せ

地染めする場合、文様部分を糊伏せします。糊袋の筒先や大きい面積の場合は、指で糊伏せしませず（写真54）。



写真54 糊伏せした布

⑧ 地入れ

地染め前に、染料の文様へのにじみを防ぐために、地入れをします。地染め前の地入れ液は、水500ccに、ふのり液（水1リットルにふのり液30ccを溶かして液をつくり、冷ましたもの）150ccの割合で溶かし、刷毛で表に1回塗ります。

⑨ 地染め

地染めには、化学染料や植物染料をつかって引き染めます。

藍型の風呂敷（うちゅくい）は、藍がめに浸しつけして染めます。

化学染料の場合、使用する布地の素材によって、使用する染料が異なります。

・木綿・麻：直接染料（シリアス染料）を使用。

淡色：水1リットルに3～5g

濃色：水1リットルに10～15g

・絹：酸性染料（デルクス染料）を使用。

染料の粉末約10gに10ccの溶解剤（グリエシンA）を加えて練ります。熱湯500ccを入れてかくはんします。ふっとうさせ、ふきんで漉し、水を加えて好みの濃さにします。その10%のふのり液を加えます。よく溶かし、同種の端切れで試し染めしてみます。

布は張木と伸子で張り、表2回、刷毛で引き染めます。

蒸したあと、色止めをします。

⑩ 色止め・水元

- ・木綿・麻の場合、ライトフィックス（液）1：水3に薄め、地染めでつかった染料と同量の液をつくり、刷毛で布に引く。乾いたあと、ぬるま湯に数時間浸け、糊を落として流水ですすぎ、絞らずに陰干しする。
- ・絹の場合、シルクフィックス3A（粉末）を水1リットルに20gの割合で、透明になるまで熱湯で溶かしたあと、火にかけて完全に溶かし、冷ましたぬるま湯に1時間浸ける。その後、水のなかに2～3時間浸けて糊を落とした後、すすぎ、しぼらずに陰干しする（写真55）。



写真55 完成した布

以上が、返し型の染め方ですが、次に、自分で、あるいは実際に学校や講習会で実習するかんたんにできる方法をまとめてみます。

3. 実際に紅型の作品をつくってみましょう

製作にかけられる時間の多少によって、「紅型染め」、「型染め」、「描き絵」の3つの段階に分け、その方法について紹介します。ただし、3種類とも、ハンカチをワンポイントで、地染めなしで白地に仕上げる方法です。

(1) 「紅型染め」：白地型の染め

(2) 「型染め」：ステンシル（型紙を当てて文様に色を摺り込む）染め

(3) 「描き絵」：合成染料をつかって筆で描く

(1) 「紅型染め」

ハンカチに、ワンポイントの図柄を考え、白地型の型染めをします。

① 図案

- ☆用意するもの：下絵用白紙、型紙（ST 8丁12番、15cm角）、えんぴつ、赤えんぴつ
- ・ワンポイントで染める絵を、13cm角内の下絵用白紙に描きます。

型紙の周囲に幅1cmほどの枠の線をえんぴつで描き、そのなかに、下絵を写し、切り抜く文様部分と残す背景部分を区別して描きます。

- ・切り取ったとき、紙が抜けてしまわないように、つなぎを赤えんぴつで描きます。

② 型紙彫り

- ☆用意するもの：図案を描いた型紙、カッター、ビニル下敷き

- ・つなぎを残し、カッターで切り抜く部分を切ります（写真56）。型紙が残ったところに色を差します。

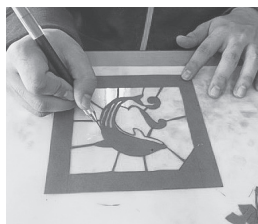


写真56 型紙彫り

③ 紗張り

- ☆用意するもの：彫った型紙、紗（15cm角）、カシュー、シンナー薄め液、カッター、ビニル下敷き、紗張り用刷毛、新聞紙

- ・カシューをシンナーで薄め、新聞紙の上に置いた型紙の上に紗を置き、1回目（カシュー：シンナー＝1：3）の紗張りをする（写真57）。カシューが完全に乾かないうちにつなぎをカッターでとる。



写真57

カシューを刷毛で塗る



写真58

カシューを塗って
紗張りした型紙

- ・2回目（カシュー：シンナー＝1：2）のカシューを塗る。目詰まり、ゆがみがないか確かめ、乾かす（写真58）。

④ 型置き

- ☆用意するもの：ハンカチ、彫った型紙、型糊、グリセリン、型へら、すり鉢、すりこぎ、ベニヤ板、タオル、新聞紙

- ・まず型糊をつくる。すり鉢に入れた型糊に、湯をすこしずつ加え、すりこぎですり混ぜ、グリセリンを加えてさらに混ぜる。とぎれなくしたたる柔らかさになるまで混ぜる。
- ・水に浸けておいた型へらの水気をふき、型紙も水に浸けてからタオルで水気をふき、新聞紙にはさんでおく。
- ・ベニヤ板にハンカチを置き画びょうで留め、文様をほどこす部分に型紙を置く。
- ・型へらで型糊をとり、ハンカチの上に置いた型紙の上から型糊を置く（写真59）。
- ・そっと型紙を外し、乾かす（写真60）。



写真59

型糊をへらで置く

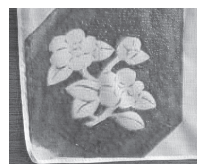


写真60

型置きしたハンカチ

⑤ 色差し・隈取り

- ☆用意するもの：大豆50g、ミキサー、漉し布、バインダー（更紗用）、色7色（ピンク、桔梗、灰色、ブルー、黄、グリーン、朱）、隈4色（赤隈、黄隈、桔梗隈、藍隈）、新聞紙、キッチンペーパー、梅皿大、梅皿小、小刷毛、隈取用筆、隈用刷毛筆

- ・「紅型の工程」で述べたように、色7色（写真61）、隈4色（写真62）をつくる。



写真61 色7色と刷毛

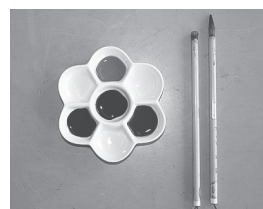


写真62 隈4色と筆

- ・新聞紙の上にキッチンペーパーを置き、その上にハンカチを置き、色差しする。2度摺りし、乾いたあと、隈取りする(写真63・64)。

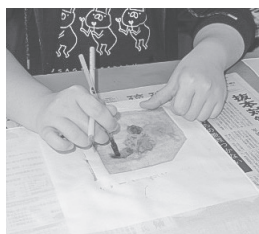


写真63

色差し後の隈取り



写真64 作品例

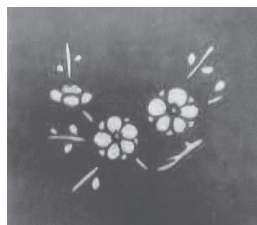


写真67 ステンシル型紙

⑥ 水元、仕上げ

- ☆用意するもの：水を張ったバット、タオル
- ・色差ししてから1週間ほど乾燥させた(枯らす)のち、色差した面を白紙でおおい、スチームアイロンを軽くかける。その後、ぬるま湯をバットに張り、数時間、ハンカチをつけ、糊を落とし、すすぐ。すすいだあと、タオルで水気を取り、乾かして完成(写真65・66)。



写真65 作品例



写真66 作品例

(2)「摺り込み」

ハンカチをワンポイントの図柄の型紙で染めます。

① 図案

- ☆用意するもの：下絵用白紙、型紙(15cm角のST 8丁10番)、えんぴつ
- ・白紙に図案を描き、下絵の上に型紙を置き、8丁10番の型紙は12番の型紙よりも薄く透けて見えるので、図案の線を型紙に写す。

② 型紙づくり

- ☆用意するもの：ビニル下敷き、カッター
- ・鉛筆の線どおりにカッターで型紙を切り抜く(写真67)。切り抜いたところに色がつく。

③ 色差し、隈取り

- ☆用意するもの：ハンカチ、スプレー糊、色7色、隈4色、梅皿大、梅皿小、小刷毛、隈取用筆、隈用刷毛筆、大豆、バインダー、ミキサー、新聞紙、キッチンペーパー、ぞうきん
- ・新聞紙の上のにのせた型紙の裏に、スプレー糊を薄くスプレーする。
- ・新聞紙とキッチンペーパーの上のにのせたハンカチの、文様を描きたい部分に、型紙を置き、貼る。切り抜いた型紙の境目を、すきまがないようによく接着させることが、文様がぼけないこつ。
- ・つくった色を差し、二度摺りしてから隈取りする(写真68)。
- ・乾いたら型紙をそっとはがして完成(写真69)。

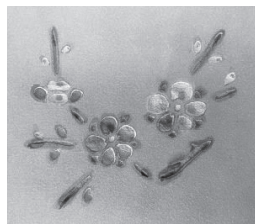


写真68

型紙の上から色差し

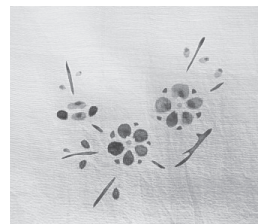


写真69

型紙をはがして完成

(3)「描き絵」

ここでは、合成染料(SEIWA社製のファブリエ使用)をつかってハンカチをワンポイントで染めます。

① 図案

- ☆用意するもの：下絵用白紙、ハンカチ、青花ペン、キッチンペーパー、新聞紙
- ・白紙に下絵を描く。
- ・ハンカチを下絵の上に置き、青花ペン(水洗

いで消える)で、透けて見える線を下書きとして描く。

② 文様を描く

- ☆用意するもの：カチンペン、ファブリエ7色（ピンク、桔梗、灰色、ブルー、黄、グリーン、朱、白）、隈（赤隈、黄隈、桔梗隈、藍隈をつくる）、ファブリエ薄め液、筆
- ・ファブリエを梅皿にとり、混ぜて色7色と、隈取り4色をつくる。
 - ・薄め液で適度な濃度に薄める。
 - ・黒のカチンペンで、青花ペンの線を清書する（写真70）。
 - ・カチンペンが乾いたら、その輪郭のなかを色差しし、隈取りする（写真71・72・73）。
 - ・乾かして完成（写真74・75）。



写真70

青花ペンに沿ってカチンペンで輪郭を描く



写真71

今回使用したファブリエ



写真72 使用した7色



写真73 隈4色

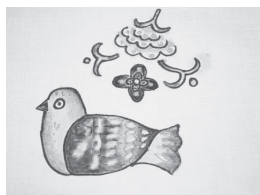


写真74 作品例



写真75 作品例

ステンシルの技法に簡略化した「摺り込み」、合成染料を使用した「描き絵」の、3種類の染め方を提案しました。「紅型染め」の①型彫りと紗張り、②型置き、③色差し・隈取り、④水元、の4工程は、それぞれ別の日にしなければならず、また③と④の間隔は、1週間程度にすることが望ましく、最低2週間は必要になります。あとの「摺り込み」と「描き絵」実習は、半日から1日のできる染めです。

かけられる時間に応じて技法を選択し、楽しんでください。

IV まとめと課題

本研究では、沖縄の染め織り教材のなかで、とくに紅型染め教育の方法について提案してきた。実際に教育現場でおこなうには、そのクラスの人数が大きく実習の要領にかかわってくると思う。大人数の場合、梅皿をつかい、梅皿に入る7色という色数の限定、ペットボトルを半分にした筆立てや、余分な色をとる雑巾、また色差しの下敷きには、習字用の毛布も使用できるが、2枚重ねの新聞紙とペーパーナプキンをつかうなど、廃物利用や身近にあるものをつかうことを考えた。

また型紙を切るカッターナイフは、彫刻刀をつかいはじめるのが小学校4年生からということで、3年生の授業でハサミをつかい、型紙は切りやすく、また子どもの健康に配慮してスプレー糊の使用を避け、プリンター用シールを使用するなど、工夫した。

時間のつかいかた、工程に、その場に応じた工夫が適宜必要であり、柔軟な対応が必要である。

沖縄の人びとに沖縄のシンボリック的存在である紅型を実際に体験してもらうことは、自文化の再認識をうながすものであり、また既製のデザインでの決められた色の染めではなく、自分のオリジナルな作品をつくることのできることに、創造する楽しさ、自己表現の喜びを体験することができ、本教材は有意義なのではないかと考える。

4. 紅型実習のポイント

伝統的な紅型の技法を踏襲した「紅型染め」、

<謝辞>

本研究は、2015年から2019年まで4年間かよっ

た那覇市の若狭公民館での紅型教室で学んだ内容をもとにしています。教室の講師および先輩の方がたにいろいろとご教示いただきましたことに、深く感謝申し上げます。

ただ元来、紅型は、色の鮮やかさや力強さにその特徴があります。しかし筆者が、紅型の工程を紹介するため自作し、写真で紹介した紅型の文様や隈取りの色については、いまだその特徴を十分に表現できていないことを付け加えさせていただきます。

なお本研究は、生活科学教育専修4年次、野元菜未さんの卒業研究としてもおこない、ゼミ生の多嘉良桃子さん、翁長豪さんの協力を得ておこないました。

また小学校での教育実践には、真嘉比小学校教諭の有銘兼志先生のご協力をいただきました。

ここに深くお礼申し上げます。

<参考・引用文献>

沖縄県立芸術大学附属研究所伝統工芸部門・柳悦州

2018年 『日本民藝館所蔵沖縄染織品第3巻・紅型』 沖縄県立芸術大学附属研究所。

鎌倉芳太郎

1962年 『古琉球型紙・五』 京都書院。

古琉球紅型浦添型研究所（伊佐川洋子・仲本のな）

2017年 『ほこらしや浦添型・沖縄染色・紅型のルーツを求めて』 東洋企画印刷。

下野敏見

2005年 「第一章・神女ノロの衣装と祭祀具
—奄美大島各地に残る貴重なノロの遺品—」
『奄美・吐噶喇の伝統文化：鹿児島県の伝統文化シリーズ3・祭りとノロ生活』 南方新社:81-97。

松本由香・佐野敏行

2020年 『沖縄の染め織りと人びとの暮らし
—家族と地域文化、経済とツーリズムから考える—』 琉球新報社。

屋富祖幸子

2010年 『琉球びんがた一染』 一染。

琉球大学附属図書館（刊年不明）『紅型古裂帖』。